

研究分野のキーワード：中国文学，魏晉南北朝，六朝，詩，謝靈運

研究紹介

私の関心は、中国において主に風景を描く詩、いわゆる叙景詩がどのように発展していったのかにあります。みなさんが漢文の教科書などで目にする漢詩には、雄大な自然の風景が描かれたものが多いと思います。しかし風景を描くということは決して昔から一般的だったわけではありません。中国最古の詩集『詩経』の中では、天地や動植物は人間の実生活と関わり合う形でしか登場しません。古代の人々の感覚では時間は過ぎ去るものではなく循環するものであったため、秋のもの悲しさが書かれたり、最後の輝きを放つ夕日が描かれたりすることはありませんでした。秋とは実りそのものでした。戦国時代になって、秋を悲しいものとする文学が登場しました。紀元後の3世紀になると、“三国志”で知られる漢末の英雄曹操は「滄海を観る」という詩の中で、日月や星々が現れ出てくるかのような大海原の雄大さを力強く描きました。しかしこれも当時としては非常にまれなことでした。自然は恐ろしいものであり、中でも海は最果ての地、暗く不気味なものというイメージでした。その海を美しく壮大に描いたことは、それまでの常識にとらわれずに新しいものを生み出していった曹操の奇才ぶりを示しています。曹操の次の世代になると、断片的ながら夕暮れの風景を描くものも現れました。

風景が詩のメインテーマとなるようになったのは4～5世紀、南朝の東晋～宋の頃からです。統一王朝の崩壊によってそれまでの価値観が揺らぎ新しい思想が展開されたこの時代、知識人たちはあらゆる存在・現象の背後には「道」「理」があり、それと一体になることが最善の生き方だと考えるようになりました。そして山水の中にこそ「道」「理」が体現されていると考えました。だからこそ山水美を表現しようとしたのです。「風景」とはもともと「風」と「景（＝光）」という意味ですが、山水詩を確立したとされる謝靈運は、太陽に照らされて輝く雲、明るく澄み渡った空と水、夕日に赤々と染まる山々など、光の中にある山水の姿を美しいものとして描きました。これは画期的なことでした。ただ彼の描く山水詩は仏教・道教などの思想と深く関わっており、描かれた山水美と彼の主張する思想とがどのように関わるのか、非常に分かりにくいところがありました。その後の詩人たちは、唐代になって詩が一つの頂点をむかえるまで、自分の思いとその場の風景とを違和感なく融合させるために様々な努力を重ねたのです。

私の研究はどのような段階を経て叙景詩が誕生し発達したのかを、一つ一つの言葉に即して考えるというものです。私たちの感覚と当時の人々の感覚は違いますから、脳の奥深くに眠る遙か昔の人間としての感覚を、言葉を手がかりに探っていくような面白さがあります。皆さんも漢詩を読んだら、ぜひ昔の人々の感覚を追体験してみてください。